

## 5. おわりに

今回の事業では、試験体数は少なかったが、徳島県産杉のツーバイフォー部材としての基礎データを得ることができた。当面の課題としては、製品の選別に MSR システムを導入して、強度のばらつきをなくす事と、コストダウンを図ることである。

伐採コスト、長さ等も含めて、山手のハードルは高いが、国産支給率を高めるためには避けて通れない問題と考えられる。伐採供給力が上昇すると仮定して、ツーバイフォー製材は幅広く丸太品質を受け入れることができ、従来の市場経由等の流通さえ必要ないと思われる。厳しいが合理化できる可能性を秘めている。そして実現できれば、山林育成、山林流通が可能となる。人工林材を利用していく上で、既成サイズの板取りをパネル化するツーバイフォー技術は有効であり適している。比べて集中荷重のかかりやすい在来工法の方が本来不向きである。また、この技術を導入することで、大きな面積、複層化にも対応しやすいために、各国でこぞって研究、採用されている工法である。このような木造技術があつて初めて、安価で安定した木造建築物の供給を可能とする施設物や公共建築にも適している。また、人工林利用を具体的に言及すると、ある一定のサイクルで山元の資源を最大歩留りさせる技術ともいえる。ツーバイフォー製材では、13cm 以上 40cm 未満がすべて適寸であり、それ以上の太さは要らない。人工林利用、経営に適したサイクルとなる。

弊社では、国産自給率 50%を目指す体制の中で、地域材を活かし、積極的に関わっていくためには、この開発事業に中長期で取り組み、是非実現したいと考えている。